

環境のイメージ形成における内的学習の構造に関する基礎分析

熊本大学大学院 学 ○小田拓実
熊本大学 正 田中尚人

1. はじめに

リンチ¹⁾は、個々の人間が物理的外界に対して抱いている総合的な心像を「環境のイメージ」と定義し、このイメージが「分かりやすい」ほど安心安全なまちづくりにつながるとした。そして、このイメージを分かりやすくするためには、外的な環境の物理的形態の操作と、内的学習による観察者の訓練が有効であるとした。しかし、現代には、この内的学習にあたる体験が不足しているため、「市民が積極的に観察者の役割を演じ環境のイメージを発展させる場」が必要であると述べた。一方で、この内的学習について自身の研究で触れておらず、その構造を明らかにする必要があると考えた。

そこで本研究では、参加者が積極的に観察者の役割を演じられる「まち歩き」を内的学習として捉え、それを通した環境のイメージ形成における、内的学習の構造を明らかにすることを目的とした。

2. 実施した調査の概要

本章では、既往研究から調査分析に用いる概念を整理し、それを基に調査手法を定めた。

(1) 調査分析に関する概念の整理

篠原氏²⁾は、主体と対象との関係について景観把握モデルを示し、視点側のデザインの重要性について述べた。リンチは、環境のイメージについて、視覚的な要素である Identity (そのものであること)、Structure (構造・関係性) と、個人的な背景や対象への意味づけである Meaning (意味) の三成分に分析されるとした。これらの概念を用いて、まち歩きを通した環境のイメージの形成モデルを図-1 に整理した。内的学習は、視点場の中に、他者が存在しう状況で景観を把握し、環境のイメージを形成する。

(2) 調査手法の整理

調査対象は、対象地を訪れた経験が少ない人物の方が、内的学習を通した地域把握に関する純粋な情報が得られると考え、対象地と出身地が異なる人物を対象とした。調査では、観察者に「印象に残った空間や対象物」を自由に撮影してもらい、「最も地域らしさを表す

写真」を 3 枚、順位をつけて選定してもらった。同時に、各自が選定した写真 3 枚に対して、選定理由を自分の言葉で作成してもらった。

(3) 実施した調査概要

本研究では、平成 30 年 11 月 17 日に、天草市河浦町今富地区にて、参加総数 35 名のまち歩きを実施した。その内、大学生 11 名を調査対象とした。

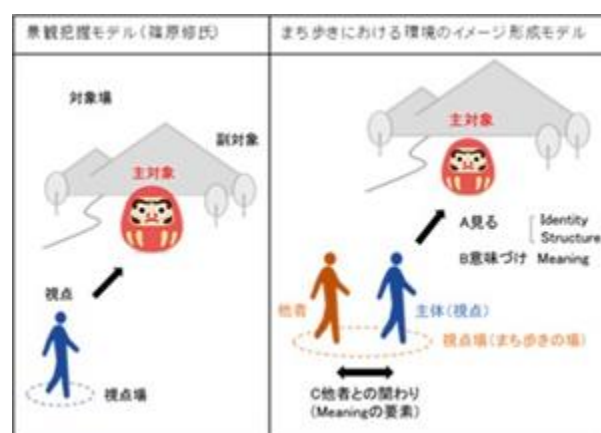


図-1 まち歩きにおける環境のイメージ形成モデル

3. 環境のイメージ形成に関する分析

本章では、2 章で得た情報を表-1 に整理し、「A 見る」「B 意味づけ」「C 他者との関わり」から、環境のイメージ形成における内的学習の構造について考察した。

(1) 対象に関する分析

観察者により撮影された写真から、Identity・Structure について分析した。被写体の種類に着目すると、下級生ほど近景を捉え、上級生ほど遠景を捉えることが分かった。撮影されたエリアに着目すると、行き道から 42%、帰り道から 6%の写真が選定されており、最初に体験した対象が印象に残りやすいことが分かった。

写真の撮影地点を地図にプロットしたものを図-2 に示した。行き道エリアの地点 1 では DIJK の 4 名が「干し柿を作っている様子」を地域らしい対象とした。八十八ヶ所参りエリアの地点 2 では、ACDGHUJ の 7 名が「今富地区を一望できる風景」を地域らしい対象とした。このように、多くの観察者が地域らしいと感じる対象が存在することが分かった。

(2) 対象への意味づけに関する分析

写真の選定理由から、Meaning について分析した。表-1 のように、観察者による対象への意味づけを文化的景観の要素である、日常・歴史・自然に分類した。対象への意味付けは、「住民の親しさ」や「生活感」などの、「日常」が最も多く 42%であった。

次に、選定理由から、対象への意味づけに用いた要素を抽出し、体験したこと・聞いたこと・知っていたことに分類した。その結果、今富地区を数回歩いた経験のある上級生ほど「知っていたこと」を用いて対象へ意味づけを行い、歩きなれていない下級生ほど「体験したこと」

「聞いたこと」を用いた。このように、初めて歩く地域では、他者から得た情報を意味づけに用いる傾向があることが分かった。また、意味づけの 88%において、まち歩き最中に得た情報が用いられていた。

(3) まち歩きを通した他者との関わりに関する分析

表-1 のように、他者との関わりが意味づけに影響を及ぼしているものは全体の 33%であった。また、低学年の方が、対象への意味づけに他者との関わりが影響していることが分かった。

「他者との関わり」を写真の選定理由として扱った ACFHJK の 6 名は、他者との関わりがあったものを、「最も地域らしさを感じた写真」と意味づけた。

表-1 調査で得られた情報の整理

被験者		A 対象						B 意味づけ										C 他者 との 関わり	
学年	番号	撮影エリア			種類			順位			文化的景観			意味づけに用いた要素					
		行き	地蔵	帰り	遠景	中景	近景	1	2	3	日常	歴史	自然	種類	時				
M2	A	1	○					○				○				体験したこと	ING		
		2		○			○			○			○			聞いたこと	ING	○	
		3		○			○					○				聞いたこと	ING	○	
	B	1	○				○				○		○			体験したこと	ING		
		2		○			○				○		○			体験したこと	ING		
		3		○			○				○		○			体験したこと	ING		
	C	1	○				○						○			聞いたこと	ING	○	
		2		○			○				○					知っていたこと			
		3		○			○						○			知っていたこと			
	M1	D	1	○				○					○				体験したこと	ING	
			2		○			○					○				体験したこと	ING	
			3		○			○					○				体験したこと	ING	
E		1		○						○			○			知っていたこと			
		2		○							○			○		知っていたこと			
		3		○			○						○			体験したこと	ING		
B4	F	1	○				○				○					体験したこと	ING	○	
		2		○			○					○				体験したこと	ING	○	
		3		○			○					○				体験したこと	ING	○	
	G	1	○				○				○			○		体験したこと	ING		
		2		○			○						○			体験したこと	ING		
		3		○			○						○			体験したこと	ING		
B3	H	1	○				○						○			体験したこと	ING		
		2		○			○						○			聞いたこと	ING	○	
		3		○			○					○			○	体験したこと	ING		
	I	1	○				○					○				体験したこと	ING		
		2		○			○						○			体験したこと	ING		
		3		○			○					○				体験したこと	ING		
	J	1	○				○				○					聞いたこと	ING	○	
		2		○			○						○			聞いたこと	ING	○	
		3		○			○					○				体験したこと	ING		
	K	1					○				○					体験したこと	ING	○	
		2	○							○						聞いたこと	ING	○	
		3		○							○					体験したこと	ING		
計	11	33	14	17	2	12	9	11				14	9	10			29	11	
割合			42%	52%	6%	36%	27%	33%				42%	27%	30%			88%	33%	

4. おわりに

本研究では、まち歩きを通した、環境のイメージ形成における、観察対象とその意味づけ、他者との関わりを分析した。その結果、観察者が他者と共有した場に存在する対象に、多くの人が地域らしさを意味づけることが分かった。また、近・中・遠景のどれも、他者に関わることから意味づけを行っており、まち歩きを通して他者と関わるのが環境のイメージの発展に影響を与えることが分かった。

参考文献

- 1) ケヴィン・リンチ, 都市のイメージ新装版, 岩波書店 2007.
- 2) 篠原修, 土木学会編新体系土木工学 59 土木景観計画, 技報堂, p. 28, 1982.



図-2 観察者による写真の撮影地点